

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820023

研究課題名（和文） 日本語の疑問文とそれに関連する構文の歴史的・対象言語学的研究

研究課題名（英文） Historical and Contrastive Linguistics Study of Japanese Questions and their Related Constructions

研究代表者

衣畑 智秀 (KINUHATA TOMOHIDE)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：80551928

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語の疑問文とそれに関連する構文について、主に中世以降に焦点をあててその歴史を記述した。その結果、疑問の助詞「か」「やら」が、中世以降さまざまな用法を派生させていく様相を明らかにできた。また、日本語の歴史を韓国語、琉球語と対照することで、一般言語学に貢献できるような、変化のプロセスの解明を目指した。本研究では、そのような歴史変化のパターンとして、主文に付加した節を標示する形式が、単文内で機能するようになる統語的变化を考えた。それにより、不定の「か」や例示の「やら」の歴史変化が合理的に説明できることを示した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I described the history of questions and their related constructions, particularly focusing on the languages after Middle Japanese. As the result of the survey, it was demonstrated how the particles such as *ka* and *yara*, which are used to form questions, acquired various uses. This project aimed also at the linguistic investigation of the historical process by contrasting the historical data of Japanese with Korean and Ryukyuan. One of the patterns which I consider as worth those investigations is the one where a marker of the adjoined clause evolves into a particle functioning in matrix clauses. We showed that this syntactic process can explain the genesis of indefinite use of *ka* and that of exemplification use of *yara*.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 970,000 | 291,000 | 1,261,000 |
| 2010年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,870,000 | 561,000 | 2,431,000 |

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：疑問、選言、不定、日本語史、琉球語

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本語の歴史的研究において、疑問文については、多くの研究が蓄積されてきたと言える。しかし、その中心は奈良時代から平安時代、そして院政鎌倉期が中心であり、その後の歴史変化がどのようになってい

るかについてはさほど明らかではなかった。このような研究状況の背景としては、疑問文の研究は、常に係り結びの研究と合わせて行なわれてきた、ということが考えられる。係り結びは、一般的に平安時代に多用され、その後、院政鎌倉期には固定的になり、中世に

において消滅したと考えられている。また、係り結びは古典語を特徴付ける構文と見なされ、多くの研究が行なわれてきたため、結果として疑問文の歴史的研究も、この時代が中心になったと考えられる。

しかし、近年の研究により、中世以降、日本語の疑問文は他の構文と関連し、興味深い変化を遂げていることが明らかになっている。まず、奈良時代及び平安時代の疑問文に使われていた助詞「か」「や」は、直接疑問文にしか使われていなかったことが、近藤（1987）「古文における疑問表現―「や」と「か」―」（『国文法講座第三巻』、明治書院）で指摘され、間接疑問文は、室町期になってから現れたことが、高宮（2005）「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」（『三重大学日本語日本文学』16）によって、実証的に示された。さらに申請者は、この直接疑問から間接疑問へという変化を、「話し手自身の持つ」疑問の「意味」（speaker-oriented meanings）が失われていく過程であると考え、この過程は、間接疑問文の歴史にも観察できることを考察していた（‘Historical Development from Subjective to Objective Meaning: A Case of Japanese Question Particle’ The 15th Workshop on East Asian Linguistics, UCLA, 2009年2月）。すなわち、間接疑問は、室町・江戸期には「私は誰がくるか知らない」のように話し手の不確実性を表していたものが、明治期に入ると、「彼は誰が来るか知らない」と三人称が主語になったり、「私は誰が来るか知っている」のように述語が肯定形になる例が現れるようになるのである（後の二例では、話し手が「誰が来るか」に対して不確かさを持っているとは限らない）。

このような直接疑問文と間接疑問文が異なる時期に発生しているという指摘は、一般言語学的に珍しく、「話し手」の意味が失われていく変化は、一般的に想定されている「主観化」（Traugott & Dasher 2002）というプロセスに反するものであり、一般言語学においても、中世以降の疑問文を研究する価値は大きいと考えられた。

2. 研究の目的

以上のような研究状況を踏まえ、本研究では、日本語の疑問文とそれに関連する構文について、主に、これまで手薄であった中世以降の資料を中心に調査し、その歴史を記述するとともに、そこで得られた歴史変化が、どのように一般言語学的な枠組みの中に位置づけられるかを考え、一般言語学への貢献を目指した。また、言語学への貢献という点からは、日本語だけを対象にするのではなく、日本語と文法構造が近い琉球語や韓国語も対象にし、日本語から得られた知見が、他の

言語を説明するうえでも妥当なものかどうかの検証を行った。

3. 研究の方法

中世以降、直接疑問と関連し発達した構文は間接疑問文だけではない。此島『国語助詞の研究』（桜楓社、1966年）では、近世の後期になり、「何か」「誰か」などの「不定」の用法が「か」に現れていることを指摘しているが、その詳細なデータは提示されていない。一方、「うどんかそばかを食べる」のような選言については、これまでは「現代から古代までその用例を認めることができる」（此島1966）とされてきたが、不定、間接疑問と同じく「AかBか」が名詞句として機能するものであるため、本当に古代から認められる用法なのかが疑われた。そこで、本研究では、これら不定、選言、さらに間接疑問など、名詞句として使われる「か」がいつごろからどのように表れるかを検証するため、日本語史資料の調査を行った。一般に、すでに使われていない言語について調査を行う場合には、意味的な観点から用例を整理するよりも、構文的な観点から行った方が、より客観性の高いデータが得られる。そのため、本研究では、歴史資料から得られた「か」を、語をとるか節をとるか、文の修飾句か主文の項か、項の場合、助詞が付いているかないか、どのような助詞が付いているかなど、構文的環境によって分類を行っていった。また、歴史資料は、口頭語を反映しているとされる資料を中心に、変化が特に起こったと想定される14世紀以降の文献については約1世紀ごとに調査していった。調査に用いた文献は以下のとおりである。

8世紀：萬葉集（15万字）、11世紀：源氏物語（92万字）、14世紀：覚一本平家物語（37万字）、15世紀：史記抄（74万字）、16世紀：毛詩抄（53万字）、17世紀：虎明本狂言集（44万字）、18世紀：近松浄瑠璃（51万字）、19世紀：上方洒落本（28万字）

これまで、日本語史資料で、それぞれの文献がどれほどの言語量があるかが明示されることは少なかったが、本研究では、計量的な観点から変化を明示することを目指したため、それぞれに言語量を付した。また、「口頭語を反映している」とはいつても、その反映の仕方はさまざまであるが、「か」の用法のように極めて文法的な事例は、話者の文体意識には上りにくいため、あえて、細かい文献の差異には目を瞑り、計量的な調査を示すことを主眼においた。

以上の調査と並行して、本研究では、助詞「やら」の例示用法（田中やら山田やらが来

た)についても調査を行った。助詞「やら」は、元々「さては命のいきんずるやらんと」(延慶平家)のように疑問を表しており、中世から近世にかけて、間接疑問や不定で用いられるようになることが指摘されていた(此島 1966、高宮 2004「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」(『三重大学日本語日本文学』15)、衣畑 2007「付加節から取り立てへの歴史変化の2つのパターン」(『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房))。よって、「やら」の歴史変化も、疑問から派生した構文を対象とする本研究課題と密接な関係を持つことになる。そこで、本研究では、特にこれまで取り上げられることの少なかった例示表現について取り扱った。ここでも、例示の「やら」の成立について、「か」の調査と同様、構文的な観点を基本として分類を行っていったが、一部「AやらBやら」が連言解釈になるか選言になるかという意味的な分類も行った。この研究で使用した資料は以下のとおりである。

14世紀：覚一本平家物語、15世紀：史記抄、16～7世紀：虎明本狂言集、天草版平家物語、18世紀：近松浄瑠璃、上方咄本類(100万字)、18～9世紀上方語：上方洒落本類、18～9世紀江戸語：江戸洒落本類、滑稽本・人情本類(計60万字)

この調査では、調査対象の関係から、上方方言と江戸方言を扱ったが、18～9世紀に出版された洒落本を比較することで、この地理的な差異を埋めるように努めた。

また、本研究では、以上の疑問文の歴史がどのようにして起こったのかをより詳しく分析するため、琉球語の調査を行った。琉球語では、一般的に係り結びが使用されるが、上記のような不定、選言、間接疑問などの日本語史における発生は、係り結びの衰退と関係しているのではないかと考えたためである。もし、係り結びの衰退が、上記のような構文の発生を促した要因であるならば、係り結びの使われる琉球諸語では、未だ上記のような構文が発達していないことも予想される。そのような観点から、本研究では、宮古島市新里方言の疑問文とそれに関連する構文の調査を行った。

4. 研究成果

以上の調査に基づいて、本研究では二本の論文を公刊し、五本の研究発表を行った。以下、それぞれの成果について、順に述べていく。

論文②は、「か」の歴史変化についての調査を元に、「か」の選言、不定の用法は、古代語には見られず、それぞれ、中世以降に発達したものであることを実証的に示したも

のである。

選言や不定の用法は、「か」が名詞句の位置で使われることを典型にし、逆に、「か」が文末で使われた場合には疑問の意味を残していると言える。よって、この論文では、「か」が文末に近い位置で用いられるか、名詞句として使われているかといった構文的な観点から、「か」の歴史変化を示した。その結果、句が並列される選言の「か」は、史記抄(15世紀)以降、典型的な名詞句の位置で用いられるようになることが明らかになった。もっとも、源氏物語にも、「か」が属格の「の」やコピュラ動詞に前接する例が多く見え、一見名詞句として用いられているように見られるが、中古語では、「の」や「なり」は主文末の要素を受ける特異な特徴を持ち、「か」そのものは疑問として使われていると考えることができるため、例外とはならない。また、選言の「か」が中世以降発達したという考え方は、「か」の省略が起こりやすくなるのも、中世以降であるというデータからも補強された。

不定の「か」については、一方、江戸期後期になるまで例がほとんど見られなかった。これは、従来の指摘と一致するが、本調査では、名詞句の位置以外についても調査し、副詞的な用法に限っては、江戸前期にも見られることを示した。

以上の結果に基づいて、本論文では、選言、間接疑問、不定の派生関係について議論し、選言が、間接疑問や不定に先行するが、その間に派生関係はないことが分かった。一方、間接疑問と不定の派生関係は、データからは明確にはできなかった。

論文①は、論文②で論じた疑問から派生した「か」の用法のうち、特に不定の用法を取り上げ詳しく論じたものである。

これまで、現代日本語の「何か」「誰か」などの不定については、古代語の係り結びから変化したと考えられることが多かった(阪倉 1975『文章と表現』角川書店など)。しかし、係り結びから不定が発生したとすると、格助詞に後接する係り結び(「何をか思はむ」)から格助詞に前節する不定(「何かを思う」)へという構造の変化と、文のタイプの変化(疑問から平叙文などへ)を説明しなければならない。また、係り結びの消滅と不定の発生には、200年ほどの差があり、実証性にも乏しい。

そこで、この論文では、疑問文が主節に付加した構文(以下主節付加疑問。例えば、「老眼の何見てか、「ムムウ、まづ職人に似合わぬあの鬢付が気に入らぬ」(老眼が何を見たのか、「…鬢付が気に入らぬ」と言った)心中重井筒)から、不定の用法が発生したと考えた。この考え方では、不定の発生した時期との時代的な隔たりは問題にならず、さらに、

「か」以外に不定を表す形式も同様に説明できる利点がある。たとえば、韓国語にも、日本語の不定に似たwh-in-kaという形式があるが、韓国語で係り結びが使われた事実はない。また日本語でも、「何やら」という不定が中世には見られたが、「やら」自体は係り結びとして使われなかった。その一方、これらは主節付加疑問としても使われていたため、本論文の観点からは、説明が可能となるのである。

発表⑤は、例示を表す「やら」について、その発生時期と、それがどのような用法から派生したかを論じたものである。

「やら」は、例示の用法以外に、間接疑問、不定としても使われていたため、それらとの区別が例示の成立を考える上でまず問題になる。本論文では、「やら」が並列されるか否か、並列された場合に「AやらBやら」の解釈が連言解釈になるか否か（「田中やら山田やらが来た」が田中も山田も来たことを意味するか）という観点から用例を分類し、近松浄瑠璃から例示の用法が見られるようになることを実証的に示した。

また、そのようにして分類された例示の例を、構文的に分類すると、近世前期においては名詞句としては使われず、主節に付加（主節を修飾）する節として「～やら」が使われていることが分かった。間接疑問、不定は、定義的に名詞句として使われる構文であり、よって、例示の「やら」は構文的にそれらから発生したとは考えにくい。故に、本論文では、例示の「やら」は、主節付加疑問（「思イ成シヤラン、風声モ哀シムヤウナゾ」蒙求抄）から派生したと結論した。

発表④及び③は、間接疑問の歴史について述べたものである。

間接疑問の歴史についての基本的な考えは、すでに2009年2月に行われたThe 15th Workshop on East Asian Linguistics (UCLA)で発表済みであったが、近世後期、及び明治期の資料からデータを補充して改めて発表を行った。その結果、日本語の間接疑問文は、直接疑問文から受け継いだ「話し手の不確定性」という特徴を失っていくことで成立していくということが、一層明らかにできた。

以上が、直接疑問文から発達した、選言、不定、例示、間接疑問についての、本研究の成果であるが、直接疑問についての成果としては、発表②と①がある。

発表②は、大阪方言の終助詞「ねん」を扱ったものである。大阪方言の「ねん」は、純粹な質問文として使用することはできず、上昇調の疑問文では不適格になる。しかし、反語や、話し手が偏見を持っている場合は、下降調で使用することができる（ツッコミ「何でやねん↓」）。このような「ねん」の特徴は、構成性意味論では説明できず、イントネーシ

ョンのように超分節的に働くことと分析することで説明できることを論じた。この論文は、疑問文の歴史に直接かかわるわけではないが、日本語の歴史とは即ち京阪語の歴史であり、現代大阪方言の疑問文を理解することは、日本語史を説明するうえでも重要であると考えられる。

発表①では、現代共通語、古代語、宮古島市新里方言の疑問文を比較、対照したものである。その結果、現代共通語は自問か質問かによって、疑問文の形式が分かれているのに対し、古代語は疑問詞疑問か肯否疑問かによって形式が分かれていることを示した。また、自問/質問という区別と、疑問詞疑問/肯否疑問という区別の両方が疑問文の形式分化の説明に重要な方言として、宮古島市新里方言が位置づけられることを示した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

① Kinuhata, T. & J. Whitman, Genesis of Indefinite Pronouns in Japanese and Korean, *Japanese/Korean Linguistics*, 査読有、18、(2011)、pp88-100

② 衣畑智秀・岩田美穂、名詞句位置の力の歴史—選言・不定用法を中心に、『日本語の研究』、査読有、6-4、(2010)、pp1-15

〔学会発表〕（計5件）

① 衣畑智秀、日琉語の疑問文、大阪大学国語国文学会、2011.1.8、大阪大学

② 衣畑智秀・原由理枝、The use of *EN* in Osaka Japanese: Marking the Private Knowledge, 'The 9th Workshop on Inferential Mechanisms and their Linguistic Manifestation,' 2010.12.12, 京都大学

③ 衣畑智秀、Shift from Subjective to Objective Meaning: Evidence from the History of Japanese Questions, 'Speaking of Possibility and Time: The 7th Workshop on Inferential Mechanisms and their Linguistic Manifestation', 2010.6.4, Goettingen University, Germany

④ 衣畑智秀、Historical Development from Subjective to Objective Meaning: A case of Japanese Question Particle, 'East Asian Linguistic Seminar,' 2010.1.25, Oxford University, United Kingdom

⑤ 岩田美穂・衣畑智秀、ヤラにおける例示用法の成立、日本語文法学会、2009.10.25、学習院女子大学、東京都

6. 研究組織

(1) 研究代表者

衣畑 智秀 (KINUHATA TOMOHIDE)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：80551928